

教育メディア研究の温故知新

Discovering New in Educational Media Study by Taking Lessons from the Past

鈴木 克明

Katsuaki SUZUKI

熊本大学

Kumamoto University

要約：本稿では、教育メディア研究の温故知新として、米国のAECTと我が国の状況を比較し、筆者の本学会での学びを省察して将来を展望する。教育的意図を持ったコミュニケーションの成立・拡大・改善を目指してメディアの利用方法を極めることが、日米両学会が目指している共通点である。本学会の強みは、その歴史の長さに支えられた研究成果の蓄積にある。ソーシャルメディアの時代だと喧伝されているが、これまで新しいメディアが登場するたびに繰り返されてきた過剰な期待と小規模で一過性のインパクトに反して、「今度こそは違う」と言えるだけの影響をもたらすのであろうか。新しいものが目まぐるしく続々登場する時代だからこそ、長い伝統を有する本学会が、その過去の遺産から学び直すことを意識する必要がある。会員が、容易に学び直しできるような情報環境を整備していくのも本学会の使命だろう。

キーワード：教育メディア研究、AVCR、AECT、教育メディア学会、温故知新

1. メディアかコミュニケーションか

全米教育コミュニケーション工学会 (Association for Educational Communications and Technology: AECT) の前身であった全米教育協会 (National Education Association : NEA) の視聴覚教育部会 (Department of Audio-Visual Instruction : DAVI) がその機関誌を発刊したのが今から 60 年前の 1953 年であった。その機関誌の名称は *Audio-Visual Communication Review (AVCR)*、視聴覚メディアではなくコミュニケーションを冠していた。

創刊号の冒頭論文で、当時の *AVCR* 編集顧問の一人で「経験の円錐」で有名になっていたエドガー・デールは、発刊の意義を次のように記している。「コミュニケーションするとは何か。それを考えることは、物書きとして、話し手として、教師として、ディスカッショングループの一員として、また研究者としての自分に重要なことだ (Dale, 1953, p. 3 を筆者が翻訳)」

学会名称が 1970 年に AECT に変更された時にも、

視聴覚教育が教育学に変わったが、コミュニケーションという言葉は団体名称にも学会誌名にも残された。学会名称については、当時、カリフォルニア州で優位だった「テクノロジー」とニューヨークを始めとする東部州で優位だった「コミュニケーション」という用語を両方使って AECT に決まったという記録が残っている (http://aect.site-ym.com/?page=federal_aid_boom_per)。学会誌名は、当時の編集長であったペンシルバニア州立大学のロバート・ハイニックが「視聴覚」を残すべきという主張を捨て、学会名と同じテクノロジーとコミュニケーションを冠して *Educational Communications and Technology Journal* とした。

翻って我が国では、日本放送教育学会と日本視聴覚教育学会が統合されて、1994 年に日本視聴覚・放送教育学会となり、それから 5 年間を経て「日本教育メディア学会」となった。新しい学会名にはコミュニケーションではなくメディアが冠された。当時には、視聴覚と放送という言葉を使わなくするという決断には抵抗感を示す意見が強かったと記憶

しているが、両者の共通点である「メディア」を採用することで意見の一致が図られたのだろう。その布石として、両学会が統合した時点で学会誌も統合し、その名称はすでに「教育メディア研究」(1995年1月発刊)と改められていた。

当時の日本視聴覚・放送教育学会会長であった高桑(1995)は、新しい学会誌の命名について次のように述べた。

「新しい学会として発足するにあたり、新しい地平を開き新しい課題に取り組んでゆこうとする志向が込められている、と言ってよい。放送教育、視聴覚教育を包含しつつ、それを超えたさまざまな課題がわれわれの研究の前にあることを意識しての命名であった。(中略) 紀要の創刊にあたり、学会活動の本格化を心から喜ばしく思うとともに、この紀要が会員各位の研究にとってよい情報源となり、また情報発信、情報交流のメディアとなることを希うものである。(p. 1の前頁)」

メディアとは、ロバート・ガニエの定義によれば「教授事象 (Events of Instruction : 当時の訳語では授業状況) を生起するもの」(鈴木、1985)であり、それには「教師の口頭」も含まれる(大内、1982; 中野、1982)。筆者がこれを国際基督教大学時代に学んだ時、教師がメディアとデザイナーとの二役を担っている、という捉え方がとても新鮮だった。そのことを今でも鮮明に思い出す。フロリダ州立大学では、メディアは時とともに流行が移りゆくが、設計へのシステムのアプローチは不変であるという立場から組まれたカリキュラムを学んだ(鈴木、2011)。そこでは、教授メディアとは、「オーディオ・ビデオ・フィルム・テキスト・写真・アニメーションやグラフィックなど、コミュニケーションができるさまざまなインストラクションの方法ということが出来る(ガニエほか、2007、p. 261)」と定義されていた。

教育的意図を持ったコミュニケーションの成立・拡大・改善を目指してメディアの利用方法を極める。この点が、今も昔も変わらずに日米両学会が目指している共通点ではないかと思う。時代とともにメディア環境は大きく変わりつつあるが、そこで生起するコミュニケーションをしっかりと捉える。メディアを活用することが目的ではなく、学びを支援するためのコミュニケーションをどう成立させるのかを工夫する。メディア環境が急変している今こそ、この原点を見つめ直す時ではないかと思う。

2. 日本教育メディア学会と筆者

1999年に「日本教育メディア学会」が発足し、2012年で第7期を迎えた。しかし、本学会の前身はもっと前に遡る。

1954年以来、国際基督教大学(ICU)教育研究所が主催して、毎年、視聴覚教育研究協議会を行っていた。日本放送教育学会が設立した1956年には、「経験の円錐」の提唱者エドガー・デールが来日し、第3回視聴覚教育研究協議会と第2回放送教育研究協議会に参加した。この日本滞在中のデールの講演を中心に翻訳したものが、『デールの視聴覚教育』(デール 1957)であり、1975年までに10版を重ねていることから、その影響の大きさが窺える(山本 2011)。一方で、山本(2011)が指摘しているように、近年になって「経験の円錐」が「学習ピラミッド」の原型であると誤って紹介されていることは、教育メディア研究者としては気がかりなところである。

さて、1964年には、視聴覚教育研究協議会を母体として、日本視聴覚教育学会が設立された。1960年代には、ティーチングマシンとプログラム学習の研究を推進し、のちにCAI学会(現在の教育システム情報学会)や日本教育工学会ができるまでは教育工学研究の最前線にあった。『日本教育工学会論文誌』の前身である『日本教育工学雑誌』の第一巻刊行が1976年であったことと比べると、20年以上も先輩にあたる。

戦後民主主義を普及するために米国から我が国に16ミリ映写機が貸与され、その後にラジオ放送の教育利用が普及するとともにテレビやOHPなどの機器が開発され、メディアを用いた教育が議論されたのは、戦後に創立されたICUであった。そのような歴史を知らずに筆者はICUに入学し、学会事務局要員として西本三十二会長(当時)に同行し、島根大学で開催された全国大会にかばん持ちで参加した。それが本学会との出会いであり、以来、様々な人たちと出会い、様々な研究活動をする機会に恵まれた。本学会は、研究者としての筆者を育ててくれた故郷なのである。

本学会の強みは何と言っても、その歴史の長さに支えられた研究成果の蓄積にある。技術革新で利用が可能になった様々な教育メディアで何ができるのか、また、それらをどのように活用するのが良いかが検討されてきた。適性処遇交互作用(ATI)

研究の手法を援用したメディア比較研究の知見としては、「どのメディアも万能薬にはならないが、どのメディアでも学習は成立する」ことや、「学習課題の特性と学習者の特性に応じて、最適な学習環境が異なる」、「より新しいメディアを使う方が学習効果は高まる（新奇性効果）」ことなどが明らかになっている。また、「どのメディアを選ぶかよりも、そのメディアをどう使うかで差が生じる（メディア属性、機能的同等性）」ことや、「使うメディアに対する学習者の構えによって学習効果に影響がある（メディア知覚）」、あるいは経済性の観点から「（どのメディアでも学習が成立するのだから）より簡単なメディアを使って、学習者を能動的にするのが良い（シュラムのまとめ）」などの原則が主張されてきた（佐賀、1995：鈴木、2005）。

筆者は米国留学中に二つの論文を本学会の紀要に投稿し、発表の機会を得た。これが研究者としての最初の一步であった。一本目が「教授メディアの選択にかかわる要因」（鈴木、1985）であり、留学先でお世話になっていたガニエが同僚のリーサーと取り組んでモデル化したメディア選択のプロセスを紹介・考察したものであった。二本目は「CAI教材の設計開発における形成的評価の技法について」（鈴木、1987）である。やはり留学先でお世話になったディックのシステム的な開発モデル（ディックほか、2004）で特徴的な要素であった形成的評価を紹介し、学習者全員が同じ学習経路をたどらない CAI でどう実施するかについての研究動向を考察したものであった。

帰国後も、放送文化基金の分担研究をまとめた「テレビ放送番組による外国語教育を補うドリル型 CAI の構築について」（鈴木、1989）や ARCS モデルを詳細に紹介・考察した『『魅力ある教材』設計・開発の枠組みについて』（鈴木、1995a）、あるいは構成主義に基づく教材開発プロジェクトの草分け的な存在として注目を浴びたジャスパーを紹介・考察した「教室学習文脈へのリアリティ付与について」（鈴木、1995b）など、多くの研究成果を発表する機会を得た。また、当時は日本全国を8つの地区に分けて巡回していた全国放送教育研究会連盟全国大会（第44回宮城大会）の指導室長を拝命し、1年間『放送教育』に連載した授業設計の動向と放送教育への利用をまとめた『授業デザイナー入門』（鈴木、1995c）として発表した。若輩者ながら大役を与えられて、そのために猛烈に勉強する機

会から研究者は成長するものなのだ、ということを実感した体験であり、筆者の財産となった（絶版となったため筆者 Web サイトで全文を公開している <http://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/ksuzuki/resume/books/1995rtv/rtvcont.html>）。

1980年代に世界初のマルチメディア教材という紹介で教育メディア研究の注目の的となった「ミミ号の冒険（航海）」（鈴木、1997）がその後どうなったかをインターネットで調査した研究を「Web サイトにみる 1998 年現在の『ミミ号の航海』」として発表した（鈴木、1998）。多額の資金をかけて開発した教材が長期間使われ、実際の帆船「ミミ号」が財団に買い取られ、全米各地の海岸を回って見学会が行われ、見学に行けない内陸部の子どもたちと見学者との交流や協同学習も行われていたことなどを紹介した。しかしその数年後、「ミミ号」関連の Web サイトはインターネット上から一斉に、こつ然と姿を消した。今となつては歴史的な描写にしか過ぎない研究ではあるが、内容的には現在にも示唆に富む展開事例ではないかと思う。

「ミミ号」から「パレンケ」に進化する中で、メディアもデジタル化時代を迎えた。当時のメディアの変遷を図1のように整理したことがあった（鈴木、1997）。これが現在までの間にどのように変化し、そしてこれからどのように変化していくのか、行く末が楽しみである。

このあたりに図1を挿入

NHK デジタル教材の先駆けの一つに、総合学習向け番組「おこめ」があった。この教材の評価チームの一員に加わり、その成果も本学会で公表したり（稲垣ほか、2004）、海外の国際会議に持っていったりもした（Kurokami, et al, 2003）。テレビ放送という枠組みを拡張してより豊かな学習環境にするためにはどんな情報を Web から提供して、どのような学習活動を仕掛けていくのが良いのか。テレビしかない時代ではなく様々なメディアが使える時代における学習環境の核となるテレビ番組とはどのように制作すべきか。それをどう使うことを推奨するか、どんな効果があったか（それをどう調べるのか）、教員にどう紹介して新しい授業のイメージをどう持ってもらうのか。これらの問いは、「ミミ号」以来のメディア研究で取り上げられてきたものであるが、このすべての問いに答えることは、お

そらく現在のメディア環境においても重要な研究課題ではないかと思う。

最後に、NHK 高校講座についての研究について触れておきたい。2002 年度に着手したこの通信制高校生向け番組の Web サイトを構想する研究は、化学 2 回分の試作と公開を経て、「NHK 高校講座用 Web サイトの試作」(鈴木ほか、2004) として公表した。通信制高校を取り巻く学習環境の構成要素と関係者の役割を分析し、NHK としては何ができるか、何をすべきで何はすべきでないかを提言した研究であった。「おこめ」と違ってテレビ・ラジオ全科目のすべての回をカバーする学習環境を、限られた予算内で構想するものであった。スケールメリットを出すために NHK が用意すべき必要最低限は何かを探ったもので、のちにその構想が採用されて現在に至っている (<http://www.nhk.or.jp/kokokoza/> 参照)。何もないところに新しいものを提案する研究は一回限りのチャンスであり、その提案の機会に恵まれたことは幸運であった。2013 年 4 月からスマートフォン対応が決まった現時点で、次世代に向けて何を提言していくのか、この研究は今も継続している。

3. 温故知新：歴史は繰り返す？

「夫からのクリスマスプレゼントに iPhone をもらってから、急速にメディアで学習環境が変わっていくことを実感して、メディアへの興味が戻った。」そう語ったのは、2008 年に関西大学で開催された本学会主催の国際会議 (International Conference on Media in Education : ICoME) に招いたペンシルバニア州立大学教授 (当時) のグラボウスキであった。メディアがどのように学習環境の構築に関与してきたか、その変遷を 3 つの時代に区分して振り返り、実現したことと約束されつつも未達成の課題を俯瞰した講演には、多くの示唆があった (翌年の *IJEMT* に招待論文として掲載: Grabowski, 2009)。

表 1 にグラボウスキ (Grabowski, 2009) が区分したメディアの教育利用の 3 つの時代を示す。それぞれ、プレゼンテーションメディアの時代には行動主義心理学が、双方向メディアの時代には認知主義心理学が、そしてソーシャルメディアの現在には構成主義心理学がその背景にあった。それぞれのメディアやその背景の理論は間違っていたわけではなく、その時代時代での興奮や期待があった割には不十分だったと指摘した。

このあたりに表 1 を挿入

ソーシャルメディアの時代だと喧伝されているが、これまで新しいメディアが登場するたびに繰り返されてきた過剰な期待と小規模で一過性のインパクトに反して、「今度こそは違う」と言えるだけの影響をもたらすのであろうか？ 教育メディア研究者としては、無視できない問いである。

1913 年に、映画王トーマス・エジソンは次のように断言した。「本はすぐに学校では時代遅れになるだろう…そして人間の知識のすべての分野は動画で教えることが可能になる。私たちの教育システムは、今後 10 年で完全に変わってしまうであろう」(Seattler, 1968, p.98 を Reiser, 2011 より引用・翻訳)。もちろん、現実にはそうはならなかった。その後、ペーパーレスの時代だと言われたが、やはり紙はなくならなかった。今度はデジタル教科書の登場によって、紙の教科書への依存は解消されるのだろうか？ またそうなったとして果たして何がもたらされるのだろうか？

キューバン (Cuban, 1986) は、視覚的教授の影響力が限定的であった背景には数々の要因があったと指摘している。教師の変化に対する抵抗、教師が映写機を操作する難しさ、様々な教科における適切なフィルムの不足や教育的品質の乏しさ、映画フィルムと映写機の購入費と維持費の高さなどがその要因に含まれていた(Reiser, 2011 から要約・翻訳)。その後も、教育テレビやパーソナルコンピュータなど新しいメディアが登場するたびに過度な期待が寄せられ、その割には教育方法の根幹が大きく変わることはないという歴史が繰り返されてきた。いつでも教室の三大メディアは教科書・黒板・教師 (の声) であり、それは今日でも不動の座を占めている。インターネットやソーシャルメディアでも同じことが繰り返されるのだろうか？

リーサー (Reiser, 2011) は、「コンピュータ、インターネット、およびその他のデジタルメディアは、教育と研修に完全な革命をもたらすわけではないが、以前のメディアに比べれば、教育の実施において、はるかに大きな変化をもたらす続けるだろうと予想するのは妥当だ (p.23 を翻訳)」と述べている。

表 1 で教育メディア利用を 3 つの時代に整理したグラボウスキ (Grabowski, 2009) は、現在の学習デザインの評価基準として次の 7 つを挙げた。すな

わち、①学習の文脈・問題が提示されているか？ ②豊かな学習リソースがあるか？ ③多様な省察の機会があるか？ ④社会的状況で理解を構築する機会があるか？ ⑤専門家によるフィードバックが与えられているか？ ⑥学習者の自己調整力育成が促進されているか？ ⑦学習者に学びについての責任が移譲されているか？

それぞれの時代において、メディアへの期待の割にはインパクトが少なかったことを振り返り、グラボウスキは、「以前の二つの時代にも同じ認識があったが、それと比べて今の満足な時代はより長く続くかもしれない (p. 21,筆者訳)」と招待論文の結語で述べている。今の時代でのメディア利用が進み、それによって学びが促進できる「満足な時代」が長く続くかどうかは、上記の7つの評価基準に照らして満足できるような学習環境を教育メディア研究者が実践家とともに構築できるかどうか依存していると思う。

4. おわりに：未来を拓く研究を

カナダのメディアリテラシー教育の巨匠バリール・ダンカンが亡くなったという訃報を届けてくれたのは Facebook への書き込みであった。少なくとも情報環境はかなり変わった。あとはそれをどう教育や学習に生かしていくのか、その知恵と工夫が求められている。まず本学会がソーシャルメディアを学会の活性化に役立てることから始めることが必要なのかもしれない。

AVCR は ETRD と名称を変えたが、AECT 会員には創刊号から 60 年分の全論文が無料で提供されている。印刷物に依存していた時代には考えられないアクセスの容易さであり、情報時代の恩恵である。新しいものが目まぐるしく続々登場する時代だからこそ、長い伝統を有する本学会が、その過去の遺産から学び直すことを意識する必要があるのではないか。会員諸氏が、容易に学び直しできるような情報環境を整備していくのも本学会の使命だろう。

本学会では、過去に発表された学会誌論文の電子化が提案・承認され、研究資産へのアクセスを容易にするための作業に着手した。これまでの伝統を受け継ぎ、そして変貌するメディア環境の中で教育実践をより豊かにできるように貢献し続けていくことが求められている。本学会に蓄積されてきた研究知見を参照し、「あの時代と今とでは何が同じで何が違うのか」という視点で省察を加え、受け継ぐと

ころは受け継ぎ、発展させるところを明らかにして、それに加えていく。そんな地道な学究の態度と先人たちへのリスペクトが求められているのではないかと思う。

本学会が教育メディア研究に関心を寄せる研究者と実践家がともに集い、英知を出し合うソーシャルな場として発展し、ここから教育メディア利用の新たな発想が生まれ、教育メディア研究の新たな発展が創造されるところを切に願うものである。お互いに研究仲間を誘い、楽しく実りある学会を構築していければと思う。

注：本稿は、第7期会長就任にあたって執筆した以下の原稿をもとにして、大幅に加筆したものである。

鈴木克明(2012) 教育メディア研究の温故知新, 日本メディア学会年次大会特別対話, これからの教育メディアと学びのデザイン. (2012.8.31 東北学院大学)

鈴木克明(2012) 教育メディア研究の温故知新 (視て聴いて私の提言), 視聴覚教育 2012 年 11 月号, 2-3.

参考文献

- 稲垣忠・岡本恭介・市川尚・鈴木克明・宇治橋祐之・小平さち子・黒上晴夫(2004) デジタル学習環境における教材設計—NHKデジタル教材を対象にした評価研究の取り組みから—, 教育メディア研究, 10(2): 15-22
- 大内茂男 (1982) 授業におけるメディアの選択, 大内・中野編, 教授メディアの選択と活用 (授業に生かす教育工学シリーズ第2巻), 図書文化ガニエほか著, 鈴木・岩崎 (監訳) (2007) インストラクショナルデザインの原理, 北大路書房
- Kurokami, H., Shoji, K., Okamoto, K., Nishibuchi, A. & Suzuki, K. (2002, December). "OKOME" NHKs full-digital material (2): Evaluation data from a pilot school. A paper presented at ICCE 2002, 10th International Conference on Computers in Education, New Zealand
- 佐賀啓男 (1995) 文化とのつながりを求める教育メディア研究, 教育メディア研究, 1(1) : 44-49.
- 鈴木克明 (1985) 教授メディアの選択にかかわる要

- 因, 視聴覚教育研究, 16:1-10
- 鈴木克明(1987) C A I 教材の設計開発における形成的評価の技法について, 視聴覚教育研究, 17 : 1-15
- 鈴木克明(1989) テレビ放送番組による外国語教育を補うドリル型 CAI の構築について, 放送教育研究, 17:21-37
- 鈴木克明(1995a) 「魅力ある教材」設計・開発の枠組みについて—ARCS 動機づけモデルを中心に—, 教育メディア研究, 1(1): 50-61
- 鈴木克明(1995b) 教室学習文脈へのリアリティ付与について—ジャスパープロジェクトを例に—, 教育メディア研究, 2(1) :13-27
- 鈴木克明(1995c) 放送利用からの授業デザイナー入門—若い先生へのメッセージ (放送教育叢書 23), 日本放送教育協会
- 鈴木克明 (1997) 3章 マルチメディアと教育, 赤堀侃司 (編著) 高度情報社会の中の学校—最先端の学校づくりを目指す— (学校変革実践シリーズ第3巻, ぎょうせい, 73-104
- 鈴木克明(1998) Web サイトにみる 1998 年現在の「ミミ号の航海」, 教育メディア研究, 5(1): 39-50
- 鈴木克明 (2005) [解説] 教育・学習のモデルと ICT 利用の展望: 教授設計理論の視座から, 教育システム情報学会誌, 22 (1) : 42-53
- 鈴木克明 (2011) インストラクショナルデザインとは何か (第2章), 稲垣忠・鈴木克明 (編) 授業設計マニュアル—教師のためのインストラクショナルデザイン, 北大路書房, 13-25
- 鈴木克明・市川尚・檜原芳仁・森山了一・弓場重貴・猪貝達弘 (2004) NHK 高校講座用 Web サイトの試作, 教育メディア研究, 11(1): 1-10
- 高桑康雄 (1995) 学会誌の創刊にあたって, 教育メディア研究, 1(1) : p.1 の前頁.
- ディック・ケアリー・ケアリー著, 角行之 (訳) (2004) はじめてのインストラクショナルデザイン, ピアソン・エデュケーション, 東京
- デール著, 西本三十二 (訳) (1957) デールの視聴覚教育, 日本放送教育協会
- 中野照海 (1982) 授業の設計の基礎, 大内・中野 (編著) 授業の設計と実施 (授業に生かす教育工学シリーズ第1巻), 図書文化
- Dale, E. (1953). What does it mean to communicate? *Audio-Visual Communication Review*, 1(1), 3-5.
- Grabowski, B. (2009). ICT as an enabler for effective learning design: Its evolving promise. *International Journal for Educational Media and Technology*, 3(1), 12-23. <http://jaems.jp/contents/icomelj/vol3/IJEMT3.13-24.pdf>
- Reiser, R. A. (2011). A history of instructional design and technology (Chapter 3). In R. A. Reiser, & J. V. Dempsey (Eds.), *Trends and issues in instructional design and technology* (3rd Ed.). Pearson Education, 17-34.
- 山本富美子 (2011) 明快で論理的な談話に見られる具体化・抽象化操作—Edgar DALE の「経験の円錐」の論理的認知プロセスをめぐって—アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 3 : 67-77 http://www.academicjapanese.org/AJJ3-pdf/AJJ3_67-77.pdf

表1：教育のメディア利用の時代区分ごとの特徴（Grabowski, 2009）

時代区分	行動主義心理学	認知主義心理学	構成主義心理学
学びの特徴	刺激－反応－フィードバックのサイクルで成立。明示的反応を重視	刺激－思考－反応－フィードバックのサイクルの中心にある省察を重視	個人が社会的意味のネゴシエーションを通じて理解を構築することに力点。学習者の責任と多様性の許容を強調
メディア	プレゼンテーションメディア	双方向メディア	ソーシャルメディア
	テレビ、スライド提示、映画、印刷物、初期のPC	CBI、CAI、インタラクティブビデオ、インターネット（Web1.0）	Blog、Wiki、ソーシャルブックマッキング、仮想世界（Web2.0）
実現されたこと	視聴覚メッセージ提示の選択肢が揃う。学習者が「次へ」キーで学習スピードを制御可能に。正誤判定を即時に提供できることが画期的	豊富な情報提示に加えて、質問の挿入、情報のチャンク化と学習者による選択、インターネットからの現実的な生データ利用、思考を刺激し、理解プロセスを支援する思考ツールとしてのパソコン、マルチメディアを用いた多様なフィードバック、知的エージェントなど高度な回答処理	真正な課題がインターネット上の膨大なリソースを活用して提示可能、可視化ツール・データ分析ツールとして強力なパソコン、個人・グループの省察を促進するメディア、共有ドキュメント、Wikiなどで知識構成を支援

注：Grabowski (2009)の表1－3から抜粋して筆者が訳出し、一つの表にまとめた

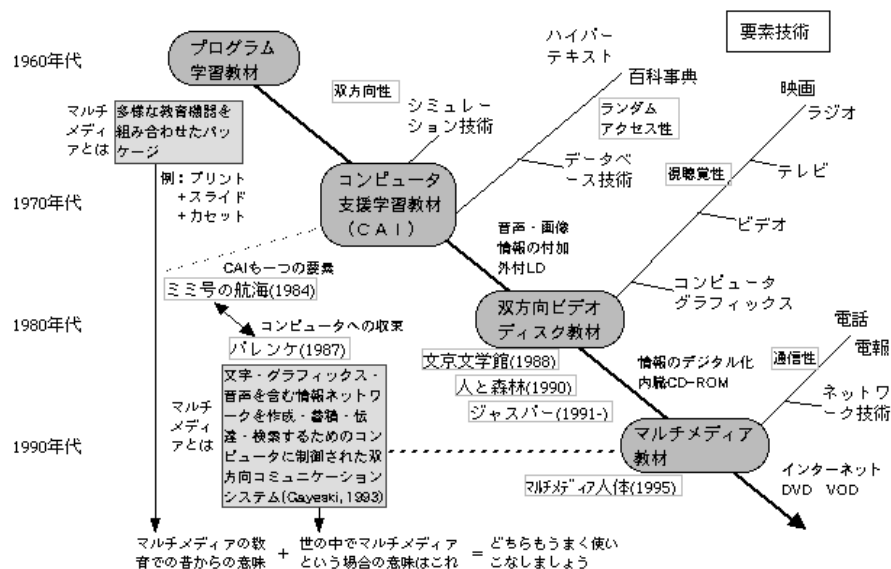


図1：マルチメディア教材の流れと要素技術の進展（鈴木、1997、図3-10より転載）

Discovering New in Educational Media Study by Taking Lessons from the Past
SUZUKI, Katsuaki (Kumamoto University)

This article compares educational media research trends in Japan and in US, together with a reflection on the author's trajectory with this academic organization, in order to discover new by taking lessons from the past. The common theme between two countries seems to study media application to gain, expand, and improve communications with educational intentions. One of the strengths of this organization is ample outcomes of research accumulated in its long history. It is said that we are now in the era of social media. Would this be different from our past experiences with other kinds of media, which came into educational scene with overwhelming expectations, but with short-term small impact on practices? Is social media different from the ones in the past? It is the era of drastic changes with lots of new stuff coming and going. It is important, therefore, to look back what we have experienced, and to learn from the past. It seems that one of the missions of this organization is to provide an information-rich environment for its members to learn from the past easily.

Keywords: educational media research, AVCR, AECT, Japan Association for Educational Media Study, discovering new by taking lessons from the past